御土居跡［南半］

遺跡見て歩きマップ

発行：京都市考古資料館
共催：西陣歴史の町協議会
後援：京都歴史文化施設クラスター実行委員会

平成31年度　文化庁　地域の博物館を中核としたクラスター形成事業

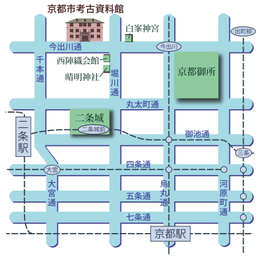
京都市考古資料館

大正３年に本野精吾の設計で建てられた旧西陣織物館を内部改修し、京都市内の発掘調査・研究の業績を発表・展示するため昭和54年11月に設立されました。特別展と常設展で構成され、約1500点の遺物が展示されています。遺物展示のほかにも、映像やパソコンで旧石器時代から近世にかけての京都の歴史を学ぶことができます。建物は、昭和59年に京都市有形文化財に登録されています。

〒602-8435
京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265-1
TEL. 075-432-3245　FAX. 075-431-3307
http://www.kyoto-arc.or.jp/museum/

入館無料・月曜休館（月曜が祝日の場合は翌日）
開館時間　9:00～17:00（入館は16:30まで）

JR京都駅より地下鉄烏丸線　今出川駅下車徒歩15分
市バス 101・102・201・203・59系統　今出川大宮下車すぐ



御土居の概要

本能寺の変の後、いち早く行動をおこした羽柴秀吉は、実質的な天下人となって戦国の世に終止符を打つことになります。その秀吉は天正13（1585）年に関白職を授かり、天正14年には豊臣姓を賜って太政大臣に就任、政権を樹立します。京都の改造にも手をつけ、同年、聚楽第を造営、周辺に武家屋敷を建設しました。次いで天正17年には内裏の修造を行ない、周辺には公家町を配置、天正18年には寺院を強制的に集めて寺町と寺ノ内を形成するとともに、１町（120m四方）の中央に南北通を設けて短冊形の町割りに改変して土地の有効活用を図りました。

最後の仕上げが天正19年、京都の周囲を取り囲むように造られた御土居でした。この御土居は外敵の襲来に備える防塁としての機能と川の氾濫から街を守る堤防としての機能を有したとされます。北は上賀茂から鷹ヶ峰、西は紙屋川から東寺の西辺、南は東寺南端の九条通、東は鴨川の西側、今の河原町通までの南北約8.5km、東西約3.5km、総延長約22.5kmに及びました。

御土居は土塁と堀からなります。堀を掘削し土を内側に盛り上げて台形状の土塁を築き、上には竹が植わっていたとされます。場所によって違いはありますが、堀は幅約20mで深さは２～３mあり、土塁は基底幅約20m、頂上部幅約５m、高さは４～５mありました。文献から天正19年閏1月に着手して３月には完成したとあることから、かなりの突貫工事であったことがわかります。

また、御土居築造により洛中と洛外の区別が明確となり、出入り口として「京の七口」が取り込まれました。江戸時代には角倉家や京都所司代によって厳重に管理されていましたが、洛中の通りの延長上にある土塁が徐々に切り崩され、洛外へ市街が拡大し、明治以降、土塁の破壊が進行します。大正７～９年には京都府史蹟勝地調査会が現状を調査し、昭和５年には８箇所、昭和40年には１箇所の合計９箇所が国の史跡に指定されて現在に至ります。

㉕ 下京区小稲荷町　東西方向の土塁基底部

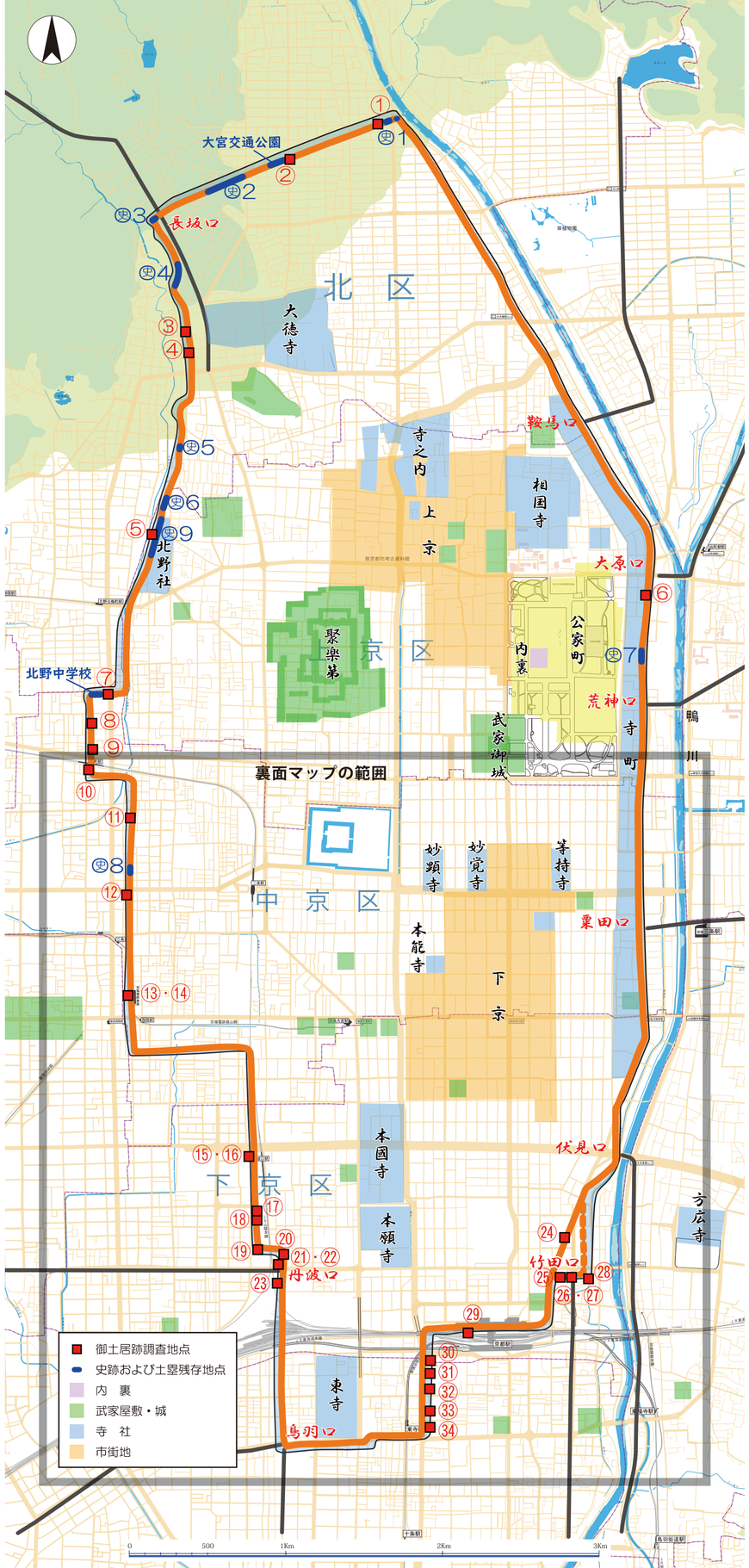
㉚ 南区西九条北ノ内町　堀と東側の耕作溝

㉜ 南区西九条鳥居口町　南北方向の堀

㉞ 南区西九条春日町　堀底の凹凸

㉞ 南区西九条春日町　出土木製品

人形頭（かしら）　アルファベット記載の荷札　墨書資料　刷毛



御土居跡の調査

明治維新後、御土居は無用の長物となり、開発に晒され破壊されていきます。そのような状況を憂えた京都府史蹟勝地調査会によって、大正７～９年（1918～1920）に最初の学術的な調査が行われました。土塁・堀の残存状況が丹念に調べられ、『京都府史蹟勝地調査会報告』第２冊（1920）にその報告が掲載されています。

その後も、京都府社寺課が昭和４年（1929）に文部省へ残存状況の良い８箇所を推挙し、翌年７月に国の史跡となりました。また、北野天満宮境内の北西の御土居跡も昭和40年（1965）に史跡に追加指定され、現在史跡御土居は９箇所となっています。またそれ以外に、北区大宮交通公園内と中京区北野中学校内の２箇所が残存しています。

御土居跡の調査は分布図に示した主として34地点で調査が行なわれてきました。御土居は、土塁とその外側に堀を伴い、土塁裾部には「犬走」も設けられていました。場所にもよりますが、土塁基底部の幅約20m、高さは４～５m、堀は幅が約20m、深さは２～３mとされます。堀は鴨川沿いの東辺には設けられなかったようです。

土塁　上記史跡９箇所とほか２箇所以外では、ほとんどが削られて残っていません。しかし、発掘調査では、④・⑤・⑧・⑨・⑪・⑬・⑭・⑲・㉑・㉕の各調査で土塁の痕跡が確認されました。調査で見つかる土塁は上部が削られており、確認されたのは盛土、あるいは地山を成形した基底部です。最も良好に残存していた盛土は最大で厚さ約２mありました（調査⑲）。堀と土塁の間には幅２～３mの犬走が設けられていました（調査④・⑪）。盛土は堀を掘った土が盛られます。堀から遠い側に盛土の土手を築き、これを土留めとして堀側へ粘土と砂礫が交互に積まれていました（調査⑬・⑭・⑲）。

御土居の南東辺では、17世紀中頃に造営された渉成園のために、北東から南西方向であった当初の御土居が東・南に付け変えられたと考えられており、調査㉕では変更後の東西方向の土塁の基底部盛土がみつかりました。この箇所では堀は設けられませんでした。

堀　堀が明確に残存しているのは史跡２のみで、史跡３・４・９では「北野社家日記」にあるように紙屋川が「大堀」であるほか、堀はほとんどが埋められています。埋没した堀は、④・⑪・⑫・⑭～⑲・㉑～㉓・㉙～㉞と多くの発掘調査でみつかっています。調査④では、紙屋川段丘を利用して造られた土塁の西側の斜面を深く削り込んだ堀の東肩がみつかりました。調査⑪では幅14m以上、深さ2.5mあり、底部が粗砂礫であったことから、紙屋川が堀内を流れていたと考えられます。堀としては明治末年頃まで残されていましたが、大正初年に土塁を崩して埋められたとみられます。一方、調査⑮～⑲、㉚～㉞では堀の底部の堆積が泥土質であることから、滞水環境にあったことがわかります。平成30年度京都市指定文化財となった御土居跡（西九条周辺）出土品は調査㉚～㉞からの一部です。

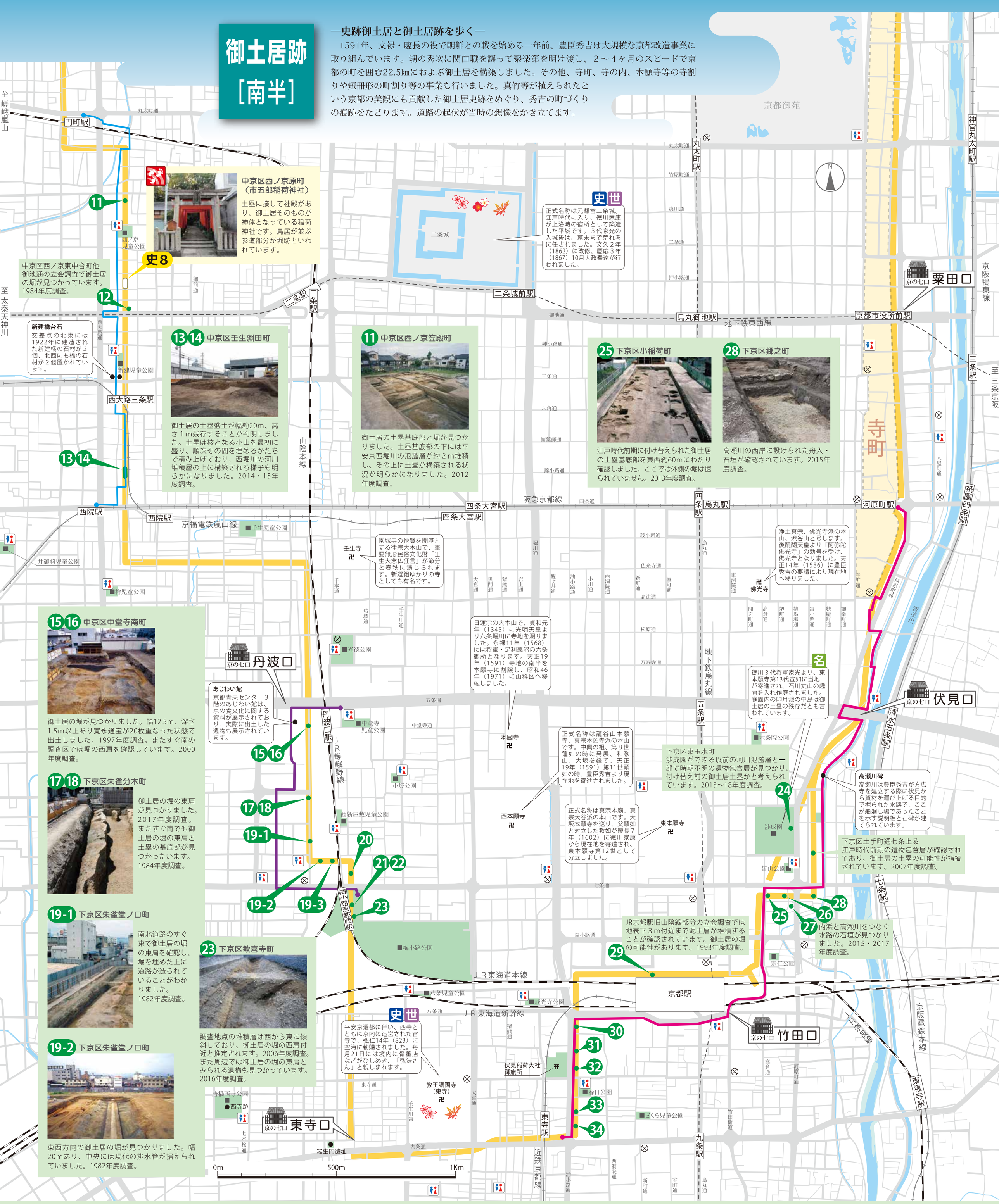
㉜ 南区西九条鳥居口町　出土状況

資料提供：公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所

御土居跡［南半］

―史跡御土居と御土居跡を歩く―

1591年、文禄・慶長の役で朝鮮との戦を始める一年前、豊臣秀吉は大規模な京都改造事業に取り組んでいます。甥の秀次に関白職を譲って聚楽第を明け渡し、２～４ヶ月のスピードで京都の町を囲む22.5㎞におよぶ御土居を構築しました。その他、寺町、寺の内、本願寺等の寺割りや短冊形の町割り等の事業も行いました。真竹等が植えられたという京都の美観にも貢献した御土居史跡をめぐり、秀吉の町づくりの痕跡をたどります。道路の起伏が当時の想像をかき立てます。



11 中京区西ノ京笠殿町

御土居の土塁基底部と堀が見つかりました。土塁基底部の下には平安京西堀川の氾濫層が約２m堆積し、その上に土塁が構築される状況が明らかになりました。2012年度調査。

史8 中京区西ノ京原町（市五郎稲荷神社）

土塁に接して社殿があり、御土居そのものが神体となっている稲荷神社です。鳥居が並ぶ参道部分が堀跡といわれています。

中京区西ノ京東中合町他
御池通の立会調査で御土居の堀が見つかっています。1984年度調査。

新建橋台石
交差点の北東には1922年に建造された新建橋の石材が２個、北西にも橋の石材が２個置かれています。

13 14 中京区壬生淵田町

御土居の土塁盛土が幅約20m、高さ１m残存することが判明しました。土塁は核となる小山を最初に盛り、順次その間を埋めるかたちで積み上げており、西堀川の河川堆積層の上に構築される様子も明らかになりました。2014・15年度調査。

25 下京区小稲荷町

江戸時代前期に付け替えられた御土居の土塁基底部を東西約60mにわたり確認しました。ここでは外側の堀は掘られていません。2013年度調査。

28 下京区郷之町

高瀬川の西岸に設けられた舟入・石垣が確認されています。2015年度調査。

史世 正式名称は元離宮二条城。江戸時代に入り、徳川家康が上洛時の宿所として築造した平城です。３代家光の入城後は、幕末まで荒れるに任されました。文久２年（1862）に改修、慶応３年（1867）10月大政奉還が行われました。

園城寺の快賢を開基とする律宗大本山で、重要無形民俗文化財「壬生大念仏狂言」が節分と春秋に演じられます。新選組ゆかりの寺としても有名です。

浄土真宗、佛光寺派の本山、渋谷山と号します。後醍醐天皇より「阿弥陀佛光寺」の勅号を受け、佛光寺となりました。天正14年（1586）に豊臣秀吉の要請により現在地へ移りました。

日蓮宗の大本山で、貞和元年（1345）に光明天皇より六条堀川に寺地を賜りました。永禄11年（1568）には将軍・足利義昭の六条御所となります。天正19年（1591）寺地の南半を本願寺に割譲し、昭和46年（1971）に山科区へ移転しました。

正式名称は龍谷山本願寺、真宗本願寺派の本山です。中興の祖、第８世蓮如の時に発展、和歌山、大坂を経て、天正19年（1591）第11世顕如の時、豊臣秀吉より現在地を寄進されました。

正式名称は真宗本廟、真宗大谷派の本山です。大坂本願寺を巡り、父顕如と対立した教如が慶長７年（1602）に徳川家康から現在地を寄進され、東本願寺第12世として分立しました。

名 徳川３代将軍家光より、東本願寺第13代宣如に当地が寄進され、石川丈山の趣向を入れ作庭されました。庭園内の印月池の中島は御土居の土塁の残存だとも言われています。

下京区東玉水町
渉成園ができる以前の河川氾濫層と一部で時期不明の遺物包含層が見つかり、付け替え前の御土居土塁かと考えられています。2015～18年度調査。

高瀬川碑
高瀬川は豊臣秀吉が方広寺を建立する際に伏見から資材を運び上げる目的で掘られた水路で、ここが船廻し場であったことを示す説明板と石碑が建てられています。

下京区土手町通七条上る
江戸時代前期の遺物包含層が確認されており、御土居の土塁の可能性が指摘されています。2007年度調査。

内浜と高瀬川をつなぐ水路の石垣が見つかりました。2015・2017年度調査。

JR京都駅旧山陰線部分の立会調査では地表下３m付近まで泥土層が堆積することが確認されています。御土居の堀の可能性があります。1993年度調査。

あじわい館
京都青果センター３階のあじわい館は、京の食文化に関する資料が展示されており、実際に出土した遺物も展示されています。

史世 平安京遷都に伴い、西寺とともに京内に造営された官寺で、弘仁14年（823）に空海に勅賜されました。毎月21日には境内に骨董店などがひしめき、「弘法さん」と親しまれます。

15 16 中京区中堂寺南町

御土居の堀が見つかりました。幅12.5m、深さ1.5m以上あり寛永通宝が20枚重なった状態で出土しました。1997年度調査。またすぐ南の調査区では堀の西肩を確認しています。2000年度調査。

17 18 下京区朱雀分木町

御土居の堀の東肩が見つかりました。2017年度調査。またすぐ南でも御土居の堀の東肩と土塁の基底部が見つかったいます。1984年度調査。

19-1 下京区朱雀堂ノ口町

南北道路のすぐ東で御土居の堀の東肩を確認し、堀を埋めた上に道路が造られていることがわかりました。1982年度調査。

19-2 下京区朱雀堂ノ口町

東西方向の御土居の堀が見つかりました。幅20mあり、中央には現代の排水管が据えられていました。1982年度調査。

23 下京区歓喜寺町

調査地点の堆積層は西から東に傾斜しており、御土居の堀の西肩付近と推定されます。2006年度調査。また周辺では御土居の堀の東肩とみられる遺構も見つかっています。2016年度調査。

19-3 下京区朱雀堂ノ口町

この調査区では東西方向の御土居の土塁と堀が一体となった断面図が作成されています。1982年度調査。

20 下京区朱雀正会町

土塁の基底部が検出され、中央には盛土が一部残存していました。2009年度調査。

30 南区西九条北ノ内町

御土居の堀を確認しました。堀は幅8.5m以上あり、土器類、木製品が出土しました。2014年度調査。

31 南区西九条鳥居口町

油小路通の東側に御土居の堀が平行することが確認されました。堀は幅14m以上、深さ2.5mあり、木製品が多数出土しました。1991年度調査。

32 南区西九条鳥居口町

堀は北側の調査区より浅い状態で見つかりました。1991年度調査。

33 南区西九条春日町

御土居の堀を確認しました。堀の規模は幅17.5m、深さ２mあり、木製品が多数出土しています。1980年度調査。

34 南区西九条春日町

油小路通九条上るの地点で南北方向の御土居の堀が検出されています。幅20m、深さ1.5mあり、江戸時代の木製品が多数出土し、中でもポルトガル語とみられる横文字木簡の出土は特記されます。1984年度調査。

・・・ Ⅳコース
・・・ Ⅴコース
・・・ Ⅵコース
・・・ 御土居 体感ポイント
※体感ポイントでは、散策道の高低差を見て、歩くことで当時の御土居堀に思いを馳せてみましょう！
・・・ 京の七口
※京に繋がる街道の出入口の総称で、俗に「七口」と称されました。
・・・ 御土居ライン
・・・ 史跡 御土居（エリア）
史1 ・・・ 現存御土居
1 ・・・ 調査御土居
・・・ 桜の名所
・・・ 梅の名所
・・・ もみじの名所
・・・ 国史跡
・・・ 警察
・・・ 国名勝
・・・ トイレ
・・・ 世界遺産